

金毓黻『渤海國志長編』の成立過程について

古畑 徹

- 一 はじめに
- 二 金毓黻の略歴
- 三 『靜晤室日記』にみる『渤海國志長編』の成立過程
 - (1) 構想段階 —— 滿洲事變以前
 - (2) 初稿執筆 —— 滿洲事變による軟禁
 - (3) 修補・出版 —— 滿洲事變による軟禁からの解放後
- 四 『渤海國志長編』の草稿と完成稿
 - (1) 構成
 - (2) 「序」から「敘例」へ
- 五 おわりに

一 はじめに

渤海國をめぐっては、かねてより中國と韓國・北朝鮮との間でその歸屬についての論争——渤海國はいずれの國の歴史に歸屬するか——がある。筆者は近年、この論争を克服するための道筋を考えるには、論争自體を史學史的に研究し、各國の主張がいかなる歴史的經緯と現代的課題から生まれたかを明らかにする精緻な作業が必要だと思ふようになってきた。本稿はそうした筆者の問題意識のもと、現代中國の對渤海認識に大きな影響を與へたと考えられる金毓黻『渤海國志長編』の成立過程を明らかにしようとするものである。

『渤海國志長編』は、中國人學者の手になる最初の本格的な渤海史研究書で、中國東北部在住の金毓黻（一八八七～一九六二）が滿洲國時代に出版したものである。¹⁾ 研究書であると同時に渤海關係史料集成としての性格を有し、現在でも渤海史研究者必携の書である。その構成を見ると傳統的な中國史書の體裁を採っているが、個々の考證の論理構成は近代的な歴史學の手法に則っており、それが今も高く評價される一つの要因である。とりわけ中國では渤海史研究の出発點として重視されており、その見解を權威化・絶對化する傾向がしばしば見られる。

また、著者金毓黻は、中國における東北地方史研究のパイオニアとして知られる。經歷は本章で述べるが、『渤海國志長編』に關係する部分だけ簡単に觸れると、彼は滿洲事變の際に關東軍に軟禁されたが、その時に本書の執筆を開始し、軟禁解除後に刊行した。また、軟禁解除後、滿洲國からの任官要請を斷りきれず、滿洲國立奉天圖書館副館長に任命されたが、一九三六年に上海に脱出。日中戦争期には四川に移っていた東北大學の教授兼東北史地經濟研究室主任として、東北地方史を中國史のなかに位置づけることを強く意識した『東北通史』を執筆・刊行し、改めて渤海の歴史を描いている。

さて、『渤海國志長編』は刊行當時から、史料集成としての性格と優れた事實考證が日本の研究者によって高く評價されてお²⁾り、そうした評價は現代中國でも變わらない。³⁾ ただ、近年の中國ではこれに加え、渤海を中國東北にできた地方民族政權とみなし、日本の侵略に對抗して東北が歴史的に中國領土であることを證明し、渤海史が中國史であることを究明しようとした著作として高く評價する見解が登場してきている。⁴⁾ いいかえれば、現代中國の渤海史認識は金毓黻以來のものであるという理解である。こうした見解を採る中國の研究者が根據とするのは、『渤海國志長編』が中原王朝との交流を「朝」と稱して藩屬關係にあったことを明瞭にする一方、日本との交流は「聘」として兩國が平等であったことを明示した點で、これによって、當時の日本の研究者が渤海と日本の往來を突出させ、渤海の獨立性を強調して、唐との緊密な關係を弱く見ていたことに反撃したとするのである。⁵⁾

しかし、この理解は疑問である。そもそも滿洲國で刊行された書物において、中國の研究者がいうような渤海を中國史

の一部と主張して日本の侵略に對抗する歴史認識を示すことなどできたであろうか。そして、こうした理解は、金毓黻の本書執筆経緯や滿洲國からの脱出、『東北通史』の記述などからの類推ではないのだろうか。また、その根拠は藩屬関係を以て中國の領域内とみなすことが前提になっている。⁶これは現在の中國邊疆史の理解と同じだが、金毓黻がそのような前提に立っていたことの論證は見當たらない。このことは無前提に現在の意識をそのまま過去の研究者に當て嵌めるという研究方法上の誤謬を犯しているようにも思われる。金毓黻に日本の學者への反撃の意圖があったならば、日本の研究者から反論があつてもよさそうなのであるが、稱贊の聲こそあれ、そうした形跡は一切存在しない。

そこで本稿では、金毓黻著『渤海國志長編』を、近年の中國の研究のように日本の滿洲史研究に對抗する研究として理解することが妥當かどうかを検討する。方法としては、『渤海國志長編』を讀み込んで文言等を詳細に解析するとともに、金毓黻の日記である『靜晤室日記』（以下、『日記』と略稱⁷）に見える『渤海國志長編』成立に關する記事を整理・分析する。そして、金毓黻が置かれた複雑な立場と心境の變化に留意して、それらを可能な限り明らかにしながら課題を考えていきたいと思う。⁸

二、金毓黻の略歴

まず、議論の前提として金毓黻の略歴を紹介する。

金毓黻、字は謹庵・靜庵、別號は千華山民、書室號は靜晤である。遼寧省遼陽城北の後八家子村の人で、漢軍旗人の家に屬する。一八八七年七月一九日（光緒十三年五月二十九日）に生まれ、一九六二年八月三日に歿した。歿年七六歳である。

彼の日記を整理した金毓黻文集編輯整理組によれば、彼の生涯は三つに時期區分できるといふ。つまり、求學時期（一八九二～一九一六年）、仕宦時期（一九一六～三六年）、教學著述時期（一九三六～六二年）である。⁹以下、これに従つてその生涯を略述するが、参考のために略年譜（表一）も附した。

表Ⅰ 金毓黻略年譜（金景芳 [1986]、金毓黻文集編輯整理組 [1993]、霍明現 [2013] による）

* 滿洲國在任期のみ滿洲國の年號を併記。年齢は『日記』の記載に従って数え年。

- 1887年7月19日（光緒13年5月29日／1歳）遼陽城北の後八家子村で生まれる。
- 1892（光緒18／6歳）郷里の私塾に通う。
- 1902（光緒28／16歳）家計を助けるために學問をやめ商賣を習う。
- 1906（光緒32／20歳）遼陽縣啓化高等小學堂長白永貞から推薦され免費で當該學堂に學ぶ。
- 1908（光緒34／22歳）奉天省立中學堂入學。
- 1912（民國元／26歳）冬、中學卒業。
- 1913（民國2／27歳）北京大學文學門（國文系）入學。
- 1914（民國3／28歳）北京大學に招聘された黃侃に師事。
- 1916（民國5／30歳）北京大學卒業。東北に戻り、瀋陽文學專門學校で教授するとともに、奉天省議會秘書を兼務、のち議會秘書長。
- 1920（民國9／34歳）黑龍江教育廳科長。史學研究への専心を日記に記す（12月3日）。
- 1921（民國10／35歳）吉林省永衡縣官銀錢號總文書・吉林交涉署第一科長兼秘書、ついで吉長道尹公署總務科長。
- 1923（民國12／37歳）吉林省財政廳總務科長。
- 1925（民國14／39歳）長春電燈廠廠長。
- 1927（民國16／41歳）『遼東文獻徵略』を自費刊行。
- 1928（民國17／42歳）『長春縣志』編纂に参加。
- 1929（民國18／43歳）東北政務委員會機要處主任秘書。
- 1930（民國19／44歳）學術團體東北學社を正式に發足させ雑誌『東北叢刊』を刊行、臧式毅に請われて遼寧省政府秘書長。
- 1931（民國20／45歳）遼寧省政府委員兼教育廳廳長。9月18日滿洲事變勃發。22日日本軍によって拘束され瀋陽の鮑文樾宅に臧式毅とともに軟禁。12月20日釋放。
- 1932（民國21・大同元／46歳）日本側の要職任官要請を斷り、奉天省府參議・省公署參事。夏、國立奉天圖書館（舊張學良邸）副館長。10月朝鮮訪書旅行。
- 1933（民國22・大同2／47歳）『遼海叢書』刊行。東亞考古學會の渤海上京龍泉府發掘に同行。
- 1934（民國23・康徳元／48歳）『渤海國志長編』刊行。5月母逝去。
- 1935（民國24・康徳2／49歳）1月臧式毅に従って日本訪問。
- 1936（民國25・康徳3／50歳）4月日本訪問・滞在、7月12日神戸より乗船し14日上海上陸。上海より南京に至る。中央大學教授・行政院參議。
- 1937（民國26／51歳）安徽省政府委員兼秘書長。日中戦争により重慶へ。
- 1938（民國27／52歳）中央大學（重慶に遷徙）教授兼歴史系主任。
- 1941（民國30／55歳）東北大學（四川省三臺縣に遷徙）教授兼東北史地經濟研究室主任。
- 1943（民國32／57歳）『東北通史』刊行。
- 1945（民國34／59歳）中央大學教授。9月監察院監察委員。
- 1946（民國35／60歳）重慶から南京に還る。
- 1947（民國36／61歳）監察委員・中央大學教授辭任。瀋陽博物館籌備委員會主任、國史館北平辦事處主任。
- 1949（63歳）國史館が北京大學に編入され、北京大學文科研究所教授。
- 1952（66歳）中國科學院歷史研究所第三所研究員。
- 1962（76歳）北京にて逝去。

求學時期は六歳からだ、途中で中斷していることもあり、實質的には二〇歳から勉學に勵み、二七歳で北京大學に入學した。北京大學では黃侃に師事して傳統的な學問を修得するとともに、民國初の激動の北京を體驗している。

次の仕宦時期は、滿洲事變で二分される。前半は、北京大學を卒業して故郷の東北に戻って仕官していた時期である。彼は東北軍閥のなかでエリート官僚としての官歴を積み、一九三〇年からは遼寧省政府主席となった臧式毅の腹心として要職に就いた。一方で早くより東北地域史研究を志して研鑽を積み、一九二七年に『遼東文獻徵略』を自費刊行してからは東北地域における東北史地研究のリーダー的存在となり、遼寧省教育廳廳長となったことと相俟って、東北地域における學會の設立や學術誌の刊行をリードした。

しかし、こうしたあり方は一九三二年九月一八日に始まる滿洲事變によって一變する。九月二二日、彼は臧式毅とともに關東軍に拘束され、瀋陽の鮑文樾宅に軟禁される。一二月二〇日、奉天廳長となることを受諾した臧式毅の斡旋で釋放されたが、その後も關東軍の監視下に置かれた。翌年になると、滿洲國への任官を要請されるようになり、斷り續けたものの、滿洲國立奉天圖書館副館長に任命されて、滿洲國に仕えることとなる。¹⁰ こうして仕宦時期の後半が始まるが、それまでのような政務に關わる役職には就かず、學術に關する職のみに就き、事實上の學究生活に入って東北史研究の成果を次々と発表・出版していった。また、日本人學者との接觸も増え、朝鮮・日本へも旅行できるようになって、日本側の監視も緩くなったが、彼はこの間、滿洲國からの脱出を考えていたとみられる。そして二度目の日本渡航中であつた一九三六年七月、神戸から船に乗って上海に脱出し、南京の國民黨政府に亡命した。

亡命後が教學著述時期で、安徽省政府委員兼祕書長などの役職に就いた時期もあつたが、主として教育研究關係の役職を歴任し、東北地域史のみならず中國史學史・中國近代史へと研究領域を擴大し、その研究成果を次々に発表・刊行していった。中華人民共和國成立後も北京に残り、北京大學教授、中國科學院歷史研究所研究員等を歴任して、一九六二年に亡くなった。

三、『静晤室日記』にみる『渤海國志長編』の成立過程

本章では、『日記』の記載を追いながら、滿洲事變以前、滿洲事變での軟禁期、軟禁からの解放後に分けて、『渤海國志長編』の成立過程を明らかにする。

(1) 構想段階 —— 滿洲事變以前

金毓黻が『日記』に渤海に關する考察を記したのは、管見の限り、遼陽を渤海の國都とする説を否定する考證を記した一九二三(民國二二)年一月三日が最初である。以後、渤海に關する考察が時折登場するようになり、翌年九月一日には、遼の永寧縣城が渤海時代に建てられたのではないかという考察に續けて、「設し此れに繼けて勤搜冥討すれば、一渤海國志を著すこと、或いは亦た甚だしくは難きの事に非ざるのみ」と記し、初めて渤海に關する史書執筆の意思表示をしてゐる。

次に渤海に關する史書執筆のことが出てくるのは、二年後の一九二六年八月一九日で、「蒙は嘗て愚かにも自ら揆らず、渤海故實の各書に散見する者を取り、分類比輯し、繋ぐに義を證かすを以てし、疑う者は之を闕き、命じて渤海國志と曰わんと欲す」と記し、その書名を『渤海國志』としようとしていたことが見える。『日記』はこれに續けて、最近になって唐晏の『渤海國志』^①の存在を知り、人づてに探して入手したが、讀んでみると考察の誤りが九割にもなるとして、その誤謬を列舉している。そこからは自分が考えていたのと同類同名の書が既にあつたことへの驚きと、その書の不十分さを確認して自らの研究の意義を確信する様が讀み取れる。また、この時點では金が豫定していた書名は『渤海國志』のままだったと考えられる。

同年一〇月一三日には「研究東北文獻之重要及其方法」という文章を記し、ここで言う東北を東三省に限定するとした

上で、東北文献研究の重要性は一に「愛郷」二に「證史」三に「分類」四に「博考」五に「求真」にあるとして、同志とともに東北文献學會を組織する意向を表明している。ここでは「證史」の例として渤海の地理研究に言及するが、「證史」の書きははじめに「吾が國の輿地を講ずるの學者、多く中原に詳しく邊省に略たり。良に輿地の學は實を徵するを貴ぶを以て、身ら其の地を履みて、博咨周訪するに非ざれば、其の究竟を得る能わず」と記しており、東北の歴史地理はそこに住む東北の研究者でなければ究められないという主張が見られる。ちなみに、重要性の筆頭には「愛郷」が掲げられているが、ここでは奉天を例に、中原の人士がその地の人物を「僕僕獷悍にして、文學・著述之士無し」と蔑むのに對し、歴史事例を擧げて反論しており、それに續けてこの「證史」の主張がある。とすれば、この主張の背景に、金の中原への強い對抗意識や東北獨自のあり方へのアイデンティティを讀み取ることができであろう。

こうした東北歴史地理研究の必要性の主張は、一九二七年四月二四日に記された東北大學での講義草稿である「東北地理略説」でさらに精緻になる。この文章では、西北歴史地理研究の盛行と對比することで東北歴史地理研究の必要性を説き、研究内容に「民族」「方輿」「外交」、研究方法に「博攷古書」「身履其地」、研究の三大課題に『渤海國志』の撰定、『金史』の改撰、『遼東新志』の重編を擧げ、これらのために東北地理學會を組織すべきことを主張する。ここから、金毓黻が渤海史研究を東北歴史地理研究でまず行うべき最重要課題と考えるようになっていたことは明らかである。

このような金毓黻の渤海史研究への意欲を強く刺激したのが、鳥山喜一の『渤海史考』との出会いである。一九二八年三月七日に初めて閲讀した金は、三月九日に『渤海史考』の地理比定の見事さを賞賛するとともに、日本語が讀めないので讀了するには翻譯してくれる者が必要だと述べている。翌日、彼は鄒陸涵に翻譯を依頼し、五月二三日にその譯稿が届き、その後はゆっくり讀み進め、九月一四日に讀了した。翌日には「渤海史考弁言」という文章を記し、鳥山の『渤海史考』が今まで見たことのなかった朝鮮史料や日本史料を引用し、さらに『五代會要』『宋史』『古今圖書集成』の從來知られていなかった記事まで拾っていることに感服し、この書に導かれれば、自分の「夙志」をかなえることも難しくないのである。

ではないかと述べている。彼の「夙志」とは渤海についての記事を編集して書を成すことで、その書名については「命じて渤海國志長編と曰う」と述べている。これが『日記』における『渤海國志長編』という書名の初出になる。

ただし、この書名はこの時に決まったのではない。『渤海國志長編』巻頭の「敘例」には、「書は唐氏の舊名に仍り、而して繋ぐに長編の二字を以てするは、則ち斬春黃師季剛の命ずる所也。」とあり、唐晏の『渤海國志』のあとに「長編」の二字を加えたこの書名の命名者は、恩師黃侃だという。同じことは、『日記』の一九三一年一月四日條にも、「往ごろ唐元素の『渤海國志』を讀みたるに、其の引據尙お疏にして、考辨未だ密ならざるを病い、改作を爲さんと思う。其の體は載籍の渤海を紀すの事に就きて、條ごとに繋ぎ件ごとに擧げ、附するに考證を以てし、參ずるに己が見を以てせんとす。嘗て此の意を以て之を黃師季剛に陳べたるに、師曰く、此れ長編の體爲り、書成れば亦た名づけて『渤海國志長編』と曰う可しと」と見える。先述のように金が唐晏の『渤海國志』を知ったのは一九二六年八月頃であり、それ以降で黃侃と會ったのは、奉天の東北大學で一年ぶりに再會した一九二七年一月七日と、もう一度東北大學で會った一九二八年二月四日である。したがって、このどちらかの會見の際に命名してもらったものと考えてよからう。

『日記』を見てくると、金毓黻の渤海史研究への入れ込みは一九二六―二八年に一つのピークがあつたと思われる。このあとも渤海史についての記述は出てくるが、滿洲事變以前において、この時期ほど集中的に出てくることはない。そして要職に就任するようになると、ほとんど渤海史に關する記述は登場しなくなり、渤海史書撰述構想の實現をしばらく先送りしたものと思われる。

(2) 初稿執筆 —— 滿洲事變による軟禁

柳條湖事件の起きた一九三一（民國二〇）年九月一八日夜、金毓黻は瀋陽郊外の自宅に居た。『日記』はこの時のことを「夜間十時、槍聲大いに作り、後ち則ち砲聲隆隆として、且に達して稍く息む」と記す。翌一九日、車に乗って瀋陽市内

に入り、臧式毅宅で善後策の會議をし、そのまま泊まった。二〇日・二一日も臧式毅宅に泊まり込みで會議がおこなわれたが、二二日午前、日本の憲兵が臧式毅宅にやって来て臧式毅を連行し、續いて金毓黻も連行され、二人とも鮑文樾の私邸の樓上に軟禁された。¹²⁾

三か月に及ぶ軟禁中の『日記』を見てくると、一月三日夜を境に心境の大きな變化があつたことが分かる。一月三日までは、『水滸傳』『清代通史』『周易』『五代史記』『徐霞客遊記』『文選』『石頭記』『老學庵筆記』『新唐書』などの讀後札記や、習字・誦詩文・參禪・天氣觀察・夢判斷・運動などで精神の平穩を保とうと努力している記事が目につく。その一方で、一〇月初めからは憂慮・煩悶・自遣・自戒・不眠を述べる記事が増加し、精神が不安定になっていることがわかる。一〇月二十九日には「患難に處おする時は、切に宜しく忍耐すべく、一切は聽天由命にして、心煩氣躁して、轉うたた以て自害す可からず」と記しており、イライラが高じて自殺してはいけなさと自らを戒めるかのような文章に、當時の彼の腦裏に自殺という選擇肢が過つていたことが讀み取れる。

こうした心境を變えるきっかけとなつたのが、一月三日夜の『渤海國志長編』をこの機に完成させようという思い附きである。このことは一月四日條にあり、まずかつて唐晏の『渤海國志』を改作しようとし、黃侃からその書が成れば『渤海國志長編』と命名するよういわれたこと、その後まもなくして黃維翰の『渤海國記』¹³⁾の存在を知り、未入手ではあるが、大略は自分の知見の範圍を出ることはなからうから、いま入手していなくても心配はないことを記した上で「余既に是に志有りて、渤海の故事に遇わば、隨時蒐集し、唐氏之得る所に過ぐることを、奚ぞ啻だに十倍のみならんや。特だ人事に牽かるるを以て、久しく未だ比次して書を成さず、昨夜忽として思い此の事に及び、擬するに此の暇に乘じ、特だ之を爲さんのみ」と記すのである。

この一月四日以降の『日記』に書かれた『渤海國志長編』撰述關係の記事を、表Ⅱに一覽化した。これによれば、一月一二日までは『渤海國志長編』執筆の記事は部分的にしか見られない。一月四日條では完成までの困難性にも觸れ

表Ⅱ 『静晤室日記』中の『渤海國志長編』執筆關係記事一覽(1)(1931年11月4日～12月31日)

月・日	記事
11・4	前日夜に『渤海國志長編』執筆を思い立つ。渤海滅亡に關する史料の異同を考證。
11・9	張建章『渤海國記』と『唐書』渤海傳の關係に關する考證。
11・11	『唐書』張九齡傳の渤海詔執筆記事を見つけ『渤海國志長編』に入れるべしとする。
11・12	『渤海國志長編』の三か月での完成を誓い、目次案を記し、必要な參考書籍を列舉。
11・18	家より執筆に必要な參考書が届き、今日より『渤海國志長編』撰集を日課とする。
11・19	總略論・世系表を撰す。唐晏『渤海國志』の朝貢表・征戰表を合わせて大事表と改題。
11・20	渤海世系表を書き終わる。續いて大事表を撰す。
11・21	渤海大事表を撰するも、未だ畢ならず。目次案を書き直す。
11・22	渤海世紀を撰す。
11・24	序を撰す。序の全文を『日記』に録す。
11・26	『日本全史』を閲し、渤海との交聘の事を別に輯録して一文を爲す。
11・27	渤海朝聘日本考を輯す。鳥山喜一『渤海史考』を讀んでこの史料を知ったことを記す。
11・28	渤海大事表を撰し畢わる。つづいて宗臣列傳を撰す。明日より日々考異數則を撰して一卷を成さんという方針を記す。
11・29	考異七則を記す。
11・30	渤海滅亡後の渤海朝貢記事についての考異を記す。
12・1	渤海宗臣列傳・諸臣列傳をすべて撰し畢わる。續いて屬部列傳を撰す。
12・2	家中より『渤海史考』『三國史記』『契丹國志』『大金國志』を取り寄せ、參考書は備わる。渤海屬部列傳・嗣胤列傳を撰し俱に畢わる。
12・3	考異三則を記す。子遺列傳を撰し未だ畢ならず。凡例を撰す。
12・4	渤海子遺列傳を撰し畢わる。十一月一八日よりわずか十六日で已に三萬餘言を成し、一日約二千餘言を書き、既に半ばを書きあげ、おおよそ年末には書き上がるだろうと記す。
12・5	渤海地理考を撰す。「終日書を檢するも、未だ一條も撰せず」と記す。
12・6	渤海地理考を撰す。考異二則を記す。
12・7	渤海地理考を撰し、五京すべて畢わる。
12・8	考異二則を記す。渤海地理考を撰し未だ畢ならず。
12・9	渤海國志地理考を撰す。已に大半を成し明日には竣わるだろうと記す。
12・10	渤海國志地理考を撰し畢わる。五日で二萬言、毎日四千言を書き、學問への耽溺はこれより過ぎたるは無く、今日一段落して頗る躊躇滿志の樂しみ有り」と記す。考異一則を記す。
12・11	考異二則を記す。渤海職官考を撰す。
12・12	渤海職官考を續撰す。
12・13	渤海職官考を撰し畢わる。つづいて族俗考を撰す。
12・14	渤海族俗考を撰し畢わる。
12・15	渤海食貨考を撰す。頗る文獻不足の感有りと記す。滿洲事變による軟禁が『渤海國志(長編)』執筆に専念する環境を作り出し、一か月以内に書き上げられたことを「此れ眞に不可思議なる者」と記す。
12・16	渤海食貨考を撰し畢わる。書き終わったが、意にかなわず、屬部表を續撰し畢わる。「正志大體已に具わり、惟だ尙お修補を需むる耳」と記す。
12・18	考異一則を記す。
12・19	渤海文徵を撰す。
12・26	友人關路夫(義鐸)より留別詩一首を受け、未完成の『渤海國志(長編)』の整理を彼に手傳ってもらいたかったのに告げることができなかった後悔を記す。
12・30	考異二則を記す。

ており、思い立ちはしたものの最終的に執筆専心を決心するには時間がかかったものと思われる。しかし一月一二日になると、「余、近ごろ渤海國志長編を撰することを發願し、三閱月内に於いて成さんことを誓う」と、三か月以内の完成を期したうえで、一〇項目の目次案と執筆に必要な参考圖書を列擧する。そして一月一日、家中よりその参考圖書が届き、「今日自り起して、渤海國志長編を撰集すること、日び常課と爲さん」と、いよいよ撰述を開始して日課にすることを明言する。そして翌日から實際に撰述に入り、一月二一日に目次案を書き直したうえで、一月一九日までほぼ毎日、撰述を續けていった。特にその執筆速度は途中から速くなり、一月一六日には「正志の大體已に具わり、惟だ尙ほ修補を需むる耳」と述べるところまで來るのである。『渤海國志長編』の初稿の大體は、このようにわずか一か月の間に一氣に書き上げられたのである。

この間のことについて、南京亡命後の一九三七年二月に當時を振り返って書いた「瀋陽蒙難記」には、「余、此の期間中に在りて、頗る讀書を以て自遣し、渤海國志長編初稿は即ち是時に草す」とある。一見すると讀書と執筆で十分氣を紛らわすことができたように讀めるが、實際には當初の一か月半が苦悶の日々だったことは先述の通りである。しかし、『渤海國志長編』執筆を思い立つてからは精神の不安定さを示す記事は大幅に減り、次第に執筆にのめり込んでいくことがわかる記述が見られるようになる。一月一五日には、「余の渤海國志を輯するが如きも、亦た之を懷くこと數年にして、未だ著筆能わず、乃に天一室を以て我を限り、思いの他事に及ぶを得ず、専心して志を致し、一月之内に於いて之を成さしむるは、此れ眞に不可思議なる者なり」と記し、軟禁という事態が宿願であった『渤海國志長編』執筆を可能にした運命の不思議さに思いを致している。

一月二〇日、金毓黻は釋放されたが、しばらくは書を読む氣も起らず、體調も悪かったようである。その後、年内には『渤海國志長編』撰述の記事は無い。ただ、一月二六日には、「數日以來、酬對に疲れ、俗務に羈がれ、迄に未だ間を得ず、前三月の内は、讀書撰文之樂ありて、恐らくは無礙なる能はざるも、能く數月の休暇を得、亦た是れ庸福なりと見る

可し。此の理正に宜く自ら諭るべくして、外人の爲めに道い難き耳」と記し、軟禁の間、讀書や著述ができたことを樂しみと感じ、不自由に留保しつつも、休みが取れてよい時間であったと振り返っている。その後の學術生活につながる心境の變化をここに見ることができよう。

(3) 修補・出版 —— 滿洲事變による軟禁からの解放後

表Ⅱに續く一九三二年一月から『渤海國志長編』が刊行される一九三四年五月一日までの、『日記』中の『渤海國志長編』執筆關係記事を一覽にしたのが表Ⅲである。これに基づくと、刊行までに、初稿繼續執筆（一九三二年一月一日～三〇日）、第一次修補・二稿作成（二月三十一日～四月三〇日）、第二次修補・三稿作成（五月三十一日～二月三十一日）、出版準備・三稿追補（一九三三年一月一日～八月二〇日）、出版事業・校正追補（八月二〇日～一九三四年五月一日）の五段階があったことがわかる。この過程を少し詳細に見ていこう。

『渤海國志長編』の初稿は、軟禁中に「大體」を書きあげてはいたが、まだいくつかの巻が残っていた。金毓黻は年が明けると早速繼續執筆に取り掛かり、文徵・考異・後紀・年表の順に執筆する。年表を書き上げたのは一月三〇日で、これで前年一月二日の目次（後述）で豫定されていたすべての巻が書き上がるので、この時點を以て初稿完成とみなすことができる。

翌一月三十一日の『日記』からは「補撰」という語が登場する。つまり、初稿に手を入れる作業が始まったのである。そのため、ここから第一次修補・二稿作成の段階とみなした。以後、四月一日までほぼ連日、金は初稿の補撰・補輯・改撰に専心し、四月一二・一三日に余録（卷二〇）を追加する。こうして一九三一年一月二日に記した當初計劃一〇項目の倍となる全二〇巻となり、二稿の大體が完成する。さらに、四月一四日以降は、敘例（卷首）・目錄（卷首）・黃侃揮毫の題・徵引書錄（附錄）などを追加して、體裁を整備している。なお、この間の『日記』の記載は簡略である。日本側

表Ⅲ 『静晤室日記』中の『渤海國志長編』執筆關係記事一覽(2)(1932年1月1日～1934年5月1日) *膨大な量となるため一部記事は關聯記事に()で附載。

月・日	記 事
1932年	
1・1	渤海文徴を撰集す。(1・5既にその半ば。1・9畢わる。詩詞雜文115首。)
1・10	始めて渤海考異1則を撰す。(1・13考異3條、1・15考異、1・19考異1條。)
1・26	渤海後紀を撰す。専ら東丹國の事を紀す。(1・27、1・28竟わる。)
1・29	渤海年表を撰す。(1・30畢わる。)
1・31	渤海總略を補撰す。(2・1、2・14、2・16増輯20餘種、蒐集ほぼ備わる。)
2・18	渤海世紀を補撰す。(2・19、2・21、2・23畢わる。)
2・22	陸游『南唐書』の東丹國進表の記事等を渤海餘録に入れる。
2・26	渤海宗臣列傳を補撰す。
2・27	渤海諸臣列傳を補撰す。(2・29、3・1、3・2畢わる。)
3・4	渤海諸臣列傳を補輯す。もとはなはだ簡なれば、特に補足を爲す。(3・5畢わる。)
3・7	渤海屬部列傳を補輯す。當日即ちに畢わる。
3・8	渤海子遺列傳を補輯す。(3・15畢わり、遺裔列傳と改稱す。)前に撰した渤海地理考が史法に合していないとして、改撰を検討する。
3・16	「渤海諸考を改撰するに頗る時日を費やす。(略)更に十餘日の工を加うれば、則ち全書殺青す」と記す。
3・17	渤海職官考を補輯し、畢わる。
3・18	渤海族俗志を補輯す。(4・4、4・5三篇分割を再考して一篇とする、4・6畢わる。)
3・22	渤海禮俗考を改輯す。(3・23畢わる。)
3・25	渤海食貨考を改輯す。(3・28、3・31已に多半を成す。)
4・8	渤海叢考を輯す。40餘事を得る。(4・9畢わる。4・19數事を得る。4・26數條を輯す。)
4・12	渤海餘録を撰す。
4・13	「渤海餘録を輯すること將に畢らんとし、全書共に二十卷を得、原作に一倍を加うるなり。唐氏の作に視ふるに至りては、五倍を増す可し」と記す。
4・14	渤海國志長編凡例を撰そうとしたが、執筆できず。
4・16	渤海志叙例を撰す。また目錄を輯し、合せて400餘頁、10餘萬言を得る。黄侃に揮毫を依頼してあつた題が寄せられる。
4・18	『遼史紀事本末』から數事を得て補う。
4・22	渤海餘録を補輯し、若干事を得る。(4・23數條を得る。)
4・30	渤海國志徴引書録を撰し、凡そ95種を得る。
5・3	地理考に附す渤海交通五道考を輯す。(5・3補撰し、「始めて撰述之難きを知る」と記す。)
5・6	「今日自り起して、渤海國志世紀・列傳諸論を撰するに、日び一首を以て度と爲し、並びに每表の前に於いて序を撰し之に繋ぐ」と記す。
5・11	渤海國志諸論及び序を撰す。章學誠の「修(方の誤記)志立三書議」を閲し、「其の義を師として文徴を作る」と記す。
5・13	渤海國志諸序及び論を撰し畢わる。「遺す所幾ばくも無し」と記す。

- 5・16 満鐵圖書館にて植野武雄と會い、『續日本紀』『高麗史』を借用。(5・20『續日本紀』所載渤海記事を輯し、5・23畢わる。5・23『高麗史』所載渤海史を輯し、畢わる。)
- 5・18 羽田亨・松崎鶴雄と遇い、『東國通鑑』『入唐求法巡禮行記』を求める。
- 5・23 先に轉引した記事を直録するため、満鐵圖書館より『日本後紀』『日本紀略』等を借用。(5・28『日本紀略』所載渤海史事を輯し、畢わる。6・1日本史籍所載渤海事を輯し、畢わる。)
- 5・31 満鐵圖書館より『東國通鑑』『海東繹史』等を借用。(6・1『東國通鑑』より續輯、6・3佚事を輯し、竟わる。6・5『海東繹史』を閲す、6・10、6・11覆閲す。)
- 6・6 西站圖書館より『續群書類聚』中の『入唐求法巡禮行記』(鉛印本)を借用。(先に6・2、6・3に景寫本を閲す。)
- 6・14 『本朝通鑑』を閲し、『續日本紀』等所載記事以外は「當に之を具録すべし」と記す。
- 6・16 『渤海史考』を5・6回閲したが、毎回得る所があり、「輯書之難、此の如き者有り」と記す。
- 6・18 日本圖書館より『本朝文粹』を借り、渤海國使裴璆の文、日本太政官復渤海中臺省牒を得る。
- 6・29 渤海國志を補輯す。(6・30輯す。)
- 7・6 『金史』の紀す渤海遺裔の事を檢す。「採伐盡さざるの感有り」と記す。
- 7・7 渤海世紀を補輯す。
- 7・11 稻葉君山と會い遼東史の研究法について懇談。稻葉は内藤湖南の遼東史實は先ず朝鮮から入手すべしとの説を力説。稻葉より南京南海府に關する一文を寄贈され、「此れ渤海史料の余に資する者有る也」と記す。
- 7・19 徐松『登科記考』を閲するも、渤海の賓貢について「獲る所無し」と記す。
- 7・23 『諸蕃志』の『函海』本を見るも、「更に渤海の事に詳しからず」と記す。
- 7・24 稻葉君山より『東國通鑑』『海東繹史』を寄贈される。感謝の書狀に、『渤海國志長編』を撰するに『滿洲發達史』より啓發されたことが甚だ多いと記す。
- 7・25 渤海志列傳を補輯し粗畢わる。20餘人、事蹟5分の1の増入は「皆東史自り得る者」と記す。
- 8・12 渤海叢考數條を輯す。(8・15數條を輯す、8・17輯す、8・28數條を撰す。)
- 8・19 渤海日本交聘表を輯す。(8・20畢わる。)
- 8・30 羽田亨より『續群書類聚』(『入唐求法巡禮行記』を含む)を寄贈され、和田清が携え來たる。
- 9・14 『元和郡縣志』を檢して1條を得る。『續資治通鑑長編』を檢して3條を得る。
- 9・23 渤海叢考を補撰し、すべて畢わる。渤海職官考を補輯し竣わる。
- 9・24 渤海地理考を補輯す。
- 9・26 渤海族俗考を補輯す。
- 10・2 渤海食貨考を補輯す。
- 10・3 渤海年表を補輯す。
- 10・4 渤海國志を補輯す。
- 10・12 百衲本『遼史』で今本の訛を正した筆記1則を渤海國志叢考に録入す。
- 10・15 朝鮮旅行に出發。(10・16京城に至り、稻葉君山・鳥山喜一・藤塚鄰を訪ねる。10・18鳥山を再訪。10・19市にて書を購入。京城發。10・21歸着。)

11・8	『金史』數卷を閲す。(11・9、11・12、11・17 畢わる。)
11・18	渤海遺裔列傳を輯補す。10 餘人を得、皆『金史』に散見す。
11・21	鳥山喜一、京城より來たりて、その歡迎宴に與かる。(11・22 來たりて談ず。)
11・23	稻葉君山が、朝鮮來訪の際に尋ねていた「弘法大師爲藤大使致渤海王子書」を『性靈集』より鈔寫して送って寄こす。
11・30	大連・墨緣堂にて『菅家文草』を購入。中を検するに『渤海國志長編』未收の記事なし。
12・2	大連圖書館にて三上次男の講演「哈爾濱東鐵博物館所得東京城渤海殘瓦」等を聞き、自らも遼慶陵碑の概要を講演。「近頃日人極めて渤海古墳に注意し、此次獲る所殊に往昔に倍す。(中略)、余暇有れば、當に親ら哈埠に往きて一たび之を觀るべし」と記す。
12・9	渤海國志長編解題を撰す。刊行に付す際に「此を以て廣告之用に代うる也」と記す。(12・10、12・11 畢わる。)
12・18	渤海叢考の各稿を整理す。
12・31	「此の一年中を回想するに、未だ甚だしくは公務に拘牽せず、頗る讀書稽古之樂有り、『渤海國志長編』の如きは差や能く脱稿す。五年中爲さんと欲して爲すに暇無き之事、今日乃ち其の業を終うるを得、此れ今年最も紀載す可き之事也」と記す。
1933 年	
1・8	金召俊より『大韓疆域考』下卷(その中に「渤海考」「渤海世家」あり)を寄贈される。
1・15	渤海國圖を撰し、存書を整理す。
1・18	渤海國疆域圖を製す。三獨奏州の所在地について決着す。
1・21	渤海圖を繪くも未だ竣わらず。
2・24	吳廷燮、『唐會要』が渤海王に賜うの詔を載せると言い、未見なので卷數の教示を懇請する。
2・25	吳廷燮より『唐會要』卷 57 の記事を教示される。史傳より失われた渤海王大瑋瑒の名があり、「按ずるに此の條極めて價值有り」と記す。
2・26	「新たに渤海材料を得れば、亟かに増入を爲し、自ら獲る所前人に過ぎたりと謂う矣、然れども亦た吳向之先生の指示之賜なり」と記す。
2・27	『渤海國志長編』を修補するも、未だ畢わらず。
3・7	稻葉君山の紹介で瀧川政次郎來たりて、『朝野僉載』所載の渤海史料に言及。鳥山喜一に自らの大瑋瑒についての見解を問う書狀を書く。
3・17	『中堂事記』『玉堂嘉話』に王庭筠の記事を見つけ「應に渤海國志に補入すべき者」と記す。
5・18	池内宏・小林胖生と、共に寧安東京城に往き上京龍泉府發掘のことを約束す。
5・22	東亞考古學會の原田淑人・鳥村義太郎と會い、小林胖生とともに東京城發掘の問題點を談ず。
5・31	哈爾賓に至り、東省特別區博物館を參觀。館員のロシア人帕諾索夫(Vladimir Vasilievich Ponosov)・華人依家駒らの東京城發掘品を見る。帕諾索夫手製の東京城圖及び渤海王宮圖を依家駒が金のために模寫す。
6・1	東亞考古學會の諸君と哈爾賓を發ち東京城へ向かう。(6・6 東京城到着、6・7~18 東京城にて發掘作業に同行、6・19 東京城を發つ、6・25 長春到着。)

8・14	『渤海國志長編要刪』の稿を排印に付す。張朝墉より黃中甫『渤海國記』遺稿の所在についての書簡を受領。張朝墉に入手の仲介を依頼する書簡を送る。陳樵岑に書簡を送り、その中に「近ごろ『渤海國志』舊稿を校理し、先ず其の一部を付印す」と記す。
8・19	張延厚への書状の中に「拙著『渤海國志長編』脱稿して年を経たるに、近ごろ楊氏『水經注疏』之例に仿い、『要刪』一卷を纂成し、先行して付印したり。日ならずして寄す可くんば、謚正を請ふ」と記す。
8・20	『渤海國志要刪』印刷完成。續いて『渤海國志長編』を印行する。4か月で完成し、費用は約千餘元と見積もる。
8・21	先に謝剛主に依頼してあった、『宋會要』卷294の2頁の抄出が届く。『滿洲源流考』所引より1條多く、即ちこれを『渤海國志長編』に補入する。
8・25	滿鐵圖書館にて『渤海國志長編要刪』について講演。
8・29	羅振玉を訪ね、明覆刊聞人銓本『舊唐書』渤海傳を検し、殿本・局本『舊唐書』渤海傳の「任雅相」の「相」が衍字であることを發見。
9・6	『渤海國志長編』第1巻の印本を校正。
9・9	『渤海國志長編』の印本を校正。
9・22	『高麗史節要』を閲し、渤海のことを輯す。
10・4	今夏、息子長衡の結婚と『渤海國志』の印行等で數千金の蓄えが盡きたとし、節約を期す。
10・6	『渤海國志』を補輯す。
10・7	沼田頼輔『渤海國與日本之交通』（『日滿の古代國交』）を閲し、未収録の渤海關係文獻3・4篇があったので、亟かに取って『渤海國志長編』を補綴する。
10・8	吳廷燮より教示された渤海史料數事を、亟に補綴する。
10・11	吳廷燮より『續資治通鑑長編』所收の渤海遺事關係史料2條を教示される。
10・15	内藤湖南を瀋陽驛に出迎える。内藤より鴻臚井刻石拓本等を贈られる。
12・16	『渤海國志』を補輯す。（12・17補輯。）
12・18	渤海遺裔大事表を補撰す。（12・19畢わる。）
12・19	『渤海國志』第9冊、今始めて畢功す。
1934年	
1・21	陳寶琮の返書を得、そのなかに「『渤海國志長編』二十巻を撰集し、業を卒うること即に在るを知り、尤も亟めて快睹たり」とある。
1・29	王季強が「渤海國志通檢」を撰したので、完成を俟って印刷に付す。
2・27	『山右石刻叢編』卷22より大氏遺裔二名を得たので『渤海國志長編』列傳に補入すべきとする。
3・8	後序一首を撰述して校印の經過を述べることを思い立つ。
3・9	後序を撰す。後序全文を『日記』に録す。
3・27	『渤海國志長編』勘誤表を撰す。
4・6	『渤海國志長編』を覆校す。
4・7	『渤海志』を校し、並びに校勘記を撰す。
4・10	『渤海長編』列傳を校す。
4・26	『渤海國志』の印刷が竣わり、裝訂をはじめる。
5・1	『渤海國志長編』1帙の裝訂が成る。

からの要職就任要請を断り、また日本軍の監視下にあったことにより、いつ見られるかもわからない『日記』に詳細な動静・心情をほとんど記さなかったものと思われる。¹⁵⁾

五月三日からは非體系的・不聯續的に補輯・追記が行われていくので、ここから第二次修補・三稿作成の段階とみなした。この間、次第に『日記』の記載量や外出回数が増加し、金への監視が緩んでいったと思われるが、そこには奉天圖書館副館長就任も關係しているであろう。また、活動がしやすくなったからか、滿鐵圖書館等より史料・研究書等を借り出して點檢・追補・考察を行っている。ただ、この時期は考證で苦心しており、五月五日には「始めて撰述之難きを知る」と記す。それまでしばしば撰述を難事ではないと述べてきたのとは、姿勢の違いが感じられる。

また、五月半ば以降、日本人研究者との接觸・交流が始まる。七月一日には稻葉君山と接觸し、これより日本人研究者との交流は擴大し、彼の助言を受けて一〇月一五日から二一日にかけて朝鮮旅行を行い、京城帝大の鳥山喜一等と接觸している。この日本人研究者らは、金より『渤海國志長編』撰述の意志を聞いて賛同したものとみられ、史料提供・書籍寄贈・情報提供・意見交換等の形でさまざまな支援を行っている。徵引書録に記された引用文献の種類は、二稿完成段階では九五種であったが、最終的には一三八種と大幅に増えている。これはこの時期における、先述のような精力的な調査と日本人研究者らの支援の結果と考えられる。¹⁶⁾

一〇月には『渤海國志長編』の梗概を記す『渤海國志長編要刪』（以下、『要刪』と略す）の初稿を撰述し、一二月に廣告代わりとして「解題」を撰述するが、これは完成がほぼ見えてきたことの反映であろう。そして、大晦日には脱稿宣言をし、三稿が完成する。

年が明けると、金は出版準備に取り掛かるが、その間も追補作業を繼續している。まず、一月に附録として掲載する疆域圖を作製する。五月には東亞考古學會の渤海上京龍泉府發掘に同行するためハルビンに到着し、東省特別區博物館の館員から手寫した東京城圖及び渤海王宮圖をもらう。これも『渤海國志長編』の附録として掲載されている。また、吳廷燮

からの教示を受けたり、鳥山喜一に自らの見解を問う書状を送ったりしながら増補改稿している。その結果、まず七月に『要刪』を増補して八月一四日に印刷に付し、二〇日に完成する。そしてその日から本編である『渤海國志長編』の印行に取り掛かるのである。したがって、ここまで出版準備・三稿追補段階、ここから出版事業・校正追補段階とした。

八月二〇日には、完成までに四か月を要するとし、刊行費用は一千余元と見積もった。しかし、印行に取りかかってからも史料の発見が續き、それは九月以降の校正で反映させるとともに、新たに第九冊目に余録を追加することになり、一月一九日に完成する。年が明けて一九三四年になると、通檢、勘誤表、識語（『日記』では後序）などの附録部分が第一〇冊としてできていく。そして四月一〇日に最終校正が終わり、二六日に印刷が完了、そして五月一日に装訂も完了して完成するのである。

ここで述べてきたことをまとめると、『渤海國志長編』は第一次修補・二稿作成段階で現在の全二〇巻の大枠ができ、第二次修補・三稿作成以降でそれを充實させ、出版直前まで改稿を重ねた。『渤海國志長編』がすぐれた史料集・研究書になったのは、第二次修補・三稿作成作業以降の徹底した研究姿勢にあると考えてよからう。そして『渤海國志長編』の刊行は一九三四年五月であり、執筆を開始した一九三一年一月から足掛け二年八か月かかった。『渤海國志長編』巻末の識語に「駁駁たること三年」とあるが、これは決して誇張した表現ではない。

さて、この章では『日記』から読み取れた『渤海國志長編』編纂過程を、時間を追いながら明らかにした。次章では、『日記』に残された『渤海國志長編』の部分的な草稿と完成稿とを比較することで、『渤海國志長編』に込めた金毓黻の思いを検討してみたい。

四 『渤海國志長編』の草稿と完成稿

『日記』に記された『渤海國志長編』の草稿と完成稿との相違を比較できる箇所は、三つある。一つ目は、『日記』の一

表Ⅳ 『渤海國志長編』完成稿の構成（卷名等は各卷冒頭の記載に依る。）

卷首：叙例、總目
 渤海國志前編：卷一總略上、卷二總略下
 渤海國志：卷三世紀第一、卷四後紀第二
 卷五年表第一、卷六世系表第二、卷七大事表第三、卷八屬部表第四
 卷九宗臣列傳第一、卷一〇諸臣列傳第二、卷一一士庶列傳第三、卷一二屬
 部列傳第四、卷一三遺裔列傳第五
 卷一四地理考第一、卷一五職官考第二、卷一六族俗考第三、卷一七食貨考
 第四
 渤海後志：卷一八文徵、卷一九叢考、卷二〇餘錄
 補遺
 附錄：附錄一渤海遺裔考、附錄第二徵引書錄、附圖二枚
 目次
 通檢

九三一年一月二日條及び同年一月二日條の目次案と實際の構成、二つ目は、一九三一年一月二日條に書かれた「序」とそれに對應する『渤海國志長編』巻頭の「叙例」、三つ目は、一九三四年三月九日條に書かれた「後序」と『渤海國志長編』巻末の「識語」である。ただし、三つ目の「後序」と「識語」は執筆時期が近くて異同が少なく、この間の變化は明確には出ない。そのため、以下では構成の違いと「序」「叙例」の相違を確認し、その背後にある金毓黻の思いに迫りたいと思う。

（一）構成

『渤海國志長編』完成稿の構成を各卷冒頭の記載に基づいて整理したのが、表Ⅳである。

この構成とその意圖を、「叙例」は次のように述べる。なお、各卷冒頭の記載は、「渤海國志前編」「渤海國志」「渤海後志」と表記が不揃いだが、「叙例」はこれを「前志」「正志」「後志」と整理して表記する。以下の記述ではこの「叙例」の表記を用いる。

正志は略ぼ四目に分ち、紀と曰い、表と曰い、傳と曰い、考と曰う。體も亦た略ぼ唐の著に同じきも、志を改めて考と爲すは、大名を避くれば也。志前に冠するに總略を以てするは、自る所を明かにすれば也。志後に附するに文徵・叢考・餘錄を以てするは、恣に詳説すれば也。（中略）然して

人を知るは則ち易く、自ら知るは實に難し。安ぞ不佞自ら謂いて恢廓と爲す者、他人の目疏略と爲す者に非ざるを知らん乎。謹んで知る所に就きて、簡に具録し、既に吾が才を竭くすも、未だ敢て自ら信ぜず。若し夫れ條理を整齊し、犁然として當る有れば、以て一國之史を成すに、正に方聞を待つ有り、是れ亦た長編と命名する之微旨也。撰集之例、彙括して左の如し。

(略)

本編、別史之例を用う。故に紀・表・傳・考の四體を立て、共に十有五卷を得。是れ正志爲りて、別に前志二卷・後志三卷を撰し、恊ぼ規模を具うるも、未だ完作と爲さず。

(略)

本編、總略を以て志前に冠し、文徵・叢考・余録・志後に繋ぐは、此れ長編と爲す所以也。總略・文徵は皆正志の從り出づる所、叢考は以て異同を明らかにし、余録は以て闕佚を槩し、亦た本編の應に具すべき所なるも、既に長編と名づけ、詳を求むるを厭わず、此れに足らず、而して之を再加整齊するも、竊かに未だ能わざるを病いたれば、敬して後賢を俟つ。

「敍例」によれば、『渤海國志長編』の本編(二〇卷)は、正史に次ぐ「別史」の體裁を採っており、中核となる「正志」一五卷は紀・表・傳・考(志)の明確な紀傳體を成し、「前志」に典故を明示するための史料集として總略を、「後志」に詳説のための諸篇を配したという。また、このような紀傳體としては未定稿の形にし、後賢を待つ姿勢を取ったことが、「長編」と命名した理由だという。「敍例」の中略箇所には「不佞の此の著、壹に史體に遵う」という記述もあり、中國の傳統的な史書の體裁を踏襲しようとしたと考えられる。

さて、この完成稿の「敍例」の末尾には「重光協洽之歲、嘉平之月、金毓勸識」とある。重光協洽は辛未の異名で一九三一年のこと、嘉平は臘月(十二月)の別稱だから、「敍例」は一九三一年十二月に執筆されたことになっている。これ

が事實ならば、本書の體裁は幽閉が解かれた時点で既に決定していたことになるが、表Ⅲにあるように、『日記』一九三二年四月一六日條に「敘例」撰述のことがあり、完成稿「敘例」末尾の執筆年月の記載は明らかな虚構である。また、引用では省略した「撰集之例」のなかに、渤海疆域圖を本編の後ろに掲載したことを記す條がある⁽¹⁸⁾。渤海疆域圖の作製は一九三三年一月なので（表Ⅲ参照）、少なくとも完成稿の「敘例」の記述はそれ以降に増補改訂されたものである。では、いつの時点で完成稿の構成は確定するのであろうか。以下、初期の目次案と比較しながら、このことを検討する。

『日記』に見える最初の目次案は、撰述開始直前の一九三二年一月二二日條にある、總略・世紀・列卿・輿地・官制・物産・朝聘・兵事・余紀・附録の一〇項目案である⁽¹⁹⁾。このうち總略・世紀以外は、完成稿の「正志」二〇卷の卷名と異なっており、紀傳體の體裁も採られていない。ただし、「列卿と曰う、其の臣宰之考す可き者を敘し、諸史之列傳に等し」とあり、紀傳體を意識してはいる。また、近年の中日の學者の渤海史研究のなからすぐれた見解を取捨選擇するという構想の附録が項目内に入っている。これは完成稿の附録と根本的に異なっており、むしろ叢考に近い。こう見てくると、當初の構想は傳統的な中國史書を意識しつつも、そこからはややはずれたものだったといえる。

次の目次案は、撰述開始から四日目の一月二二日條にある、總略・世紀・地理考・職官考・食貨考・朝聘考・世系表・大事表・同姓列傳・異姓列傳・子遺列傳・余録の一二篇目案である。これは明確な紀傳體であり、名稱に若干の差異はあるものの完成稿各巻とも對應關係がある。また、附録がなくなっている點も注意すべきである。翌二二日には、各篇に分散して敘述する豫定だった考證のうち長文のものをまとめた「考異」一卷が追加される。

さらに二日後の一月二四日條の「序」は、「正志は略ぼ四目に分ち、紀と曰い、考と曰い、表と曰い、傳と曰い、體も亦た略ぼ唐の著に同じなるも、志を改めて考と爲すは、大名を避くれば也。志前に冠するに總略を以てし、出づる所を明かにする也。志後に附するに考異・余録を以てし、恣に詳説する也」と記す。「敘例」とは、四目の順番が異なる點と、正志の後に附す項目が「文徵・叢考」ではなく「考異」になっている點が異なっているが、それ以外はほぼ同文であ

る。つまり、この時点で傳統的な中國史書の體裁を採ることが確定したと考えられるのである。

その後は、この基本線を維持しつつ追加・變更が加えられていく。表Ⅱ・表Ⅲを参照すれば明らかのように、一九三一年一月二二日段階の目次案と完成稿の項目との相違點は、まだ若干の名稱の差異は残るものの、一九三二年一月末の初稿完成段階までに改編・追加されてほぼ解消され、同年四月三〇日の二稿完成時には本編全二〇卷という完成稿とほぼ同じ姿を現す。²⁰ その後も學術研究の進展に合わせて新たな項目等が追加されるが、それらは附録に入れられ、傳統的な體裁を採る本編の基本線は維持されるのである。

ただし、紀傳體部分を「正志」、その後を「前志」「後志」として、『長編』と命名した理由がわかるように、紀傳體としては未定稿の體裁であることが明確な構成にしたのは、この一九三二年四月時點ではない。時期確定の手掛かりは、「敘例」が總略を「前志」とするのに對し、卷一・二冒頭が「前編」と記す點である。早期にこの構成を決めていれば、何度も行われた補修や校正でこの大きな齟齬に氣附かないはずはなく、齟齬の發生原因の説明としては、最終校正段階でこの構成を決め、急遽「敘例」と各卷冒頭を修正したため、というのが最も合理的であろう。こう考えれば、卷頭の總目や卷末の目次に「前志」「正志」「後志」の記載が一切ないことも、整合的に説明できる。

以上述べてきた構成の確定過程をまとめると、金毓黻が傳統的な中國史書の體裁を採ることを確定したのは、幽閉されて執筆を開始した直後であり、その後は、本編はこの基本方針を維持、はずれる部分は附録、という方向で撰述が行われた。ただ、それだけでは構成意圖が讀者に十分傳わらないと考え、最終校正段階で本編を前志・正志・後志に分類記載することにした、となる。

このように見てくると、金毓黻は傳統的な中國史書の體裁にこだわったように思われる。本書刊行前に司馬光の『通鑑舉要』や楊守敬の『水經注疏要刪』の例に倣って『要刪』²¹を刊行したのも、そうした姿勢の表れと理解できる。では、なぜ金毓黻は傳統的な中國史書の體裁にこだわったのであろうか。

現在の中國の研究者ならば、おそらく、渤海を傳統的な中國史のなかに位置づけ、唐王朝の一地方民族政權と考えていたからである、と解釋するであろう。しかし、そう捉えると、金毓黻が『渤海國志長編』を「別史」の體裁にしたと述べる點と整合しない。なぜなら、唐の一地方政權の歴史書ならば、「別史」ではなく「載記」だからである。

そこで注意すべきなのが、「序」の「不佞曩に遼東の輿地を考するに、開ま渤海に及び、因りて肅慎遺族之立國の規模を思うに、大氏に啓かれ、完顔に盛んとなり、愛新に極まるも、金清二史は、既に成書有るに、而るに渤海一國之史、獨り闕如に付したれば、竊かに以て諸を病う」の一節である。⁽²²⁾これによれば、金毓黻は渤海を金・清とのつながりの中で捉えており、金・清に史書があるのに、渤海に史書がないことを憂えている。金の史書とは『金史』、清の史書とは『清史稿』と考えられるから、その延長線上で傳統的な紀傳體の中國史書にこだわったと考える方が整合的である。そしてそれは、滿洲事變以前から見られる「愛郷」の姿勢に通じると思われるが、これについては本稿の最後であらためて觸れる。

(2) 「序」から「敘例」へ

次に「序」と「敘例」の相違を検討するが、その前に確認しておくことが二つある。一つ目は、一九三二年八月刊の『要刪』に「敘例」の節録が載せられている點である。つまり、「序」「敘例」の相違を検討するに當たり、『要刪』所收の「敘例」節録を加えた三者を比較する必要があるということである。ただし、「敘例」節録は完成稿「敘例」の中間部分⁽²³⁾だけなので、その點は注意を要する。

二つ目は、この三史料をいつの時點の記述と判斷するかである。「序」は『日記』の日附である一九三二年一月二四日時點、「敘例」は前節の検討の結果、一九三四年五月の刊行時點である。問題は『要刪』所收の「敘例」節録である。「序」が「敘例」に改稿されたのは一九三二年四月一六日、『要刪』の初稿は一九三二年一〇月、増訂は翌三三年七月、刊

行は八月である。この間、「敍例」に手を入れたという『日記』の記載はないが、『日記』にすべての修補が書かれているとは限らない。したがって、「敍例」節録はその増訂の時點、つまり一九三三年七月時點の「敍例」の記述と判断するのが妥當であろう。

以上を踏まえ、まず「序」と完成稿「敍例」の違いを見てみると、「敍例」の前半は「序」と同内容であり、これに「撰集之例」を追加して「敍例」ができていくことがわかる。とすれば、「序」から「敍例」への變更とは「序」に「撰集之例」が追加されたということであり、その追加は「敍例」が撰せられた一九三二年四月一六日で、その後、記述に合わせて變更が加えられたと考えるべきであろう。また、先に「敍例」節録は完成稿「敍例」の中間部と書いたが、正確には「敍例」のなかの「序」後半部ということになる。

次に「敍例」節録を入れて、「序」後半部の表現を比較すると、「序」と「敍例」節録の間には表現の違いがいくつも見られるのに對し、「敍例」節録から完成稿「敍例」の間には違いは二箇所しかなく、その一つ目が、『渤海國志長編』執筆の契機となった滿洲事變での幽閉についての表現の箇所である。そこは「序」、「敍例」節録、「敍例」ですべて表現が違っているので、これを次に列挙する。

光陰荏苒たるに、忽として幽居に觀い、古人の發憤して書を著すは、正に今日に在り。(序)⁽²⁴⁾

歲月荏苒たるに、忽として閑居を賦され、篋を發きて書を陳ぶるは、正に今日に在り。(敍例)節録

歲月荏苒たるに、幸いに身の閑なるに値い、篋を發きて書を陳ぶるは、正に今日に在り。(完成稿「敍例」)

この三者を比較すると、まず軟禁中に書かれた「序」は、突然の幽閉を暗示したうえで、撰述の動機がそれに對する發憤であることを明記しており、當時の心境がかなり直截に吐露されている。これが「敍例」節録になると、幽閉を暗示する表現や發憤を直接的に示す用語がなくなる。それでも「忽として閑居を賦され」という表現には、突然の滿洲事變の勃發とそれによる解職を想起させるところがあるが、完成稿の「敍例」になると、それすらなくなり、撰述の契機が閑居に

あるという点だけしか残らない。こうなると、閑居の原因は一般讀者にはわからないが、事情を知る者にはこれだけで十分に満洲事變の勃發とそれによる軟禁が撰述動機であることが傳わる。つまり、金毓黻がこの表現に最後までこだわって推敲を行ったのは、撰述動機をきちんと書き記したいという心情と、それを日本側に悟られたくないという事情が交錯したためで、最終的には事情を知る者だけにその心情が傳わる表現で決着したと考えられるのである。

二つ目の違いは、「敘例」節録の「乃ち嚮に涉覽する所の者を取り、比して之を次ぎ、凡そ五閱月にして、二十卷を得」の部分で、完成稿「敘例」では編纂期間を示す「凡そ五閱月にして」を削除したものになっていることである。このことは、前節で述べた完成稿「敘例」が執筆年月を、本来の一九三二年四月ではなく一九三一年一月としている点と關係する。『渤海國志長編』が二〇卷となったのは一九三二年一月であり（表Ⅲ参照）、これはちょうど執筆契機となった満洲事變勃發から足掛け五か月目に當たる。つまり、「敘例」節録の「凡そ五閱月にして」は事實と一致した表現であり、これは一九三二年四月の「敘例」執筆時に書かれたと推定される。しかし、これは完成稿「敘例」が一九三一年一月とすることとは齟齬する。それゆえに完成稿「敘例」では「凡そ五閱月にして」を削除したのである。そしてこのことは、「敘例」執筆を一九三一年一月と記したのが、一九三三年七月の『要刪』増訂以降であることを意味するのである。

では、なぜ「敘例」執筆時点を虚構の年月である一九三一年一月としたのであろうか。注目すべきは、附録の渤海疆域地圖（圖版1）²⁵である。この地圖の現在地名の部分には、當時すでに建國されていた満洲國はなく、既に新京に改稱された長春はそのまま記載され、基本的に現在地名は中華民國期のままとなっている。本文ならば、文章を工夫して満洲國に觸れないで済ますことも可能であろうが、歴史上の地名が現在のどこに當たるかを示すことを目的とする歴史地圖では、本來的に無理である。にもかかわらず、金毓黻は現在地名に満洲國になつて變更された地名を使用しなかつたのである。ここに彼の、満洲國を認めまいとする強い意志を読み取ることができよう。

しかし、建國から二年以上も経つた一九三四年五月刊行の著作物に、満洲國の姿のまったく見當らない地圖が載るとな



圖版1 渤海疆域地圖（『渤海國志長編』附録）

ると、金毓黻の意志が露見して問題となる可能性は高い。しかし、この地圖が一九三二年三月の滿洲國建國前に作製されていたのならば、事情は異なる。疆域地圖が作製されたのは本當は一九三三年一月だが（表Ⅲ参照）、先述のように、一九三一年一二月執筆という虚構の年月が記された完成稿「敘例」のなかに疆域地圖は載っている。つまり、完成稿では、疆域地圖の作製は滿洲國建國前であったということになっていたのである。だから、「敘例」に書かれた虚構の執筆年月とは、疆域地圖に込められた意圖を簡單には悟られないようにするための工夫と考えられるのである。

とはいえ、これだけの理由で虚構の執筆年月が記されたのなら、實際に初稿が完成した一九三二年一月であってもよく、一九三一年一二月の必然性はない。そこで注目したいのが、一九三一年一二月が軟禁を解かれた時点だという点と、前節で述べたように「敘例」に示されている『渤海國志長編』の構成が完成稿と同じだという点である。つまり、一九三一年一二月「敘例」執筆という虚構によって、『渤海國志長編』では、疆域地圖だけでなく完成稿に極めて近い初稿までもが軟禁中に書き上げられたことになって

いたのである。

重要なことは、このことが、金が滿洲事變で軟禁されたという事實を知っている人にしかわからないということである。しかも、こうした事情は周の文王の『周易』卦辭や司馬遷の『史記』の執筆事情に酷似する。傳統的な學問をした者ならば、「敍例」にわざわざ「發憤して書を著す」と書かなくても、周の文王や司馬遷の例を思い出し、金が軟禁状態に對して「發憤して」この書を著したことに氣付き、強いインパクトを感じるはずなのである。つまり、一九三一年一月「敍例」執筆という虚構は、本書誕生の経緯とそこに込めた金の思いを、わかる人にだけ伝えるための「仕掛け」だったと考えられるのである。²⁶⁾

五. おわり

本稿の課題は、金毓黻の『渤海國志長編』を、近年の中國の研究者のように、日本の滿洲史研究に對抗する研究として理解することが妥當かどうかを検討することにある。それを考えるために、ここまで『渤海國志長編』の成立過程を明らかにしてきたが、その考證結果でこの課題に關係するものを整理すると、次のようになる。

- 一、『渤海國志長編』成立過程の正確な事實關係は、金毓黻が滿洲事變で軟禁中の一九三一年一月に執筆を開始し、二月までに「大體」を書き上げ、一九三二年一月に初稿完成、第一次修補・二稿完成は同年四月、第二次修補・三稿完成は同年一二月で、さらに追補したうえで一九三三年八月から刊行作業に入り、さらに追補・修正を重ねつつ一九三四年五月刊行、である。

二、『渤海國志長編』の完成には日本人研究者の協力が重要な役割を果たしており、金毓黻は彼らの研究を高く評價し、敬意・感謝の念を持っていた。

三、金毓黻は『渤海國志長編』を傳統的な中國史書の體裁とすることにこだわったが、それは金・清という中國東北史の

流れのなかに渤海史を位置づけようとしたためである。

四、『渤海國志長編』附録の疆域地圖の現在地名の記載から、金毓黻に滿洲國否定の意識があったことは明白である。しかし、その意識が一般にはわからないようにするため、「敘例」執筆時期を事實とは異なる一九三一年一月とする操作を行い、地圖の成立を滿洲國成立前に見せかける工夫がなされた。また、あえてその時期を一九三一年一月としたのは、本書が滿洲事變における軟禁を受けての「發憤著書」の結果であることを、事情を知る者だけに傳えたかったからである。

以上の結果により、日本の滿洲支配を否定する意識が確認できた。その点からすれば、日本の滿洲支配を肯定しようとする研究への對抗意識はあったといってよいであろう。しかし一方で、日本人研究者の研究成果を高く評價し、彼らの援助を受けて『渤海國志長編』が完成したように、單純に日本の滿洲史研究を否定しているとは言えないこともまた明らかなのである。

また、最近の中國人研究者が述べるような渤海を唐王朝の一地方政權とする意識は確認できなかった。むしろ『渤海國志長編』を「別史」と位置付けて「載記」としないことからすれば、そのような意識はなかったと理解すべきである。そしてこのことは同時に、本書を「愛國」の文脈でとらえることへの躊躇を生む。

金毓黻が亡命以前において東北人としてのアイデンティティを強く持っていたことは、毛利英介氏が既に明確にされたことであり、自己を東北人研究者とする意識は、『渤海國志長編』が地域名稱に「滿洲」を使用せず、「東北」を使用している点からも明瞭である。「東北」はあくまで中國東北であるから、中國人意識がその背景にあることは明らかだが、『渤海國志長編』を分析する限り、それが強く感じられる箇所は見当たらない。滿洲國時代の刊行物であることを考えれば、斷定には慎重であるべきであろうが、本書を讀み解く限りにおいては、當時の金毓黻のアイデンティティは、東北への「愛郷」意識が中國人としての「愛國」意識より強く、『渤海國志長編』はその「愛郷」の産物、滿洲國の否定もその延長

として理解した方が妥當だと思われるのである。

この意識はその後變化していくと考えられるが、それについては稿を改めて論ずることとし、ひとまずここで筆を擱くこととする。

註

- (1) 『渤海國志長編』初版本の發行地・發行元・出版年月については不明瞭な點があり、これを引用する諸文献や所藏圖書館の目録などの記載に異同があつて、どれが正しいかで多くの研究者を悩ましてきた。本稿では千華山館、一三四年とするが、これは本稿と現在用意している別稿の検討結果を踏まえたものである。
- (2) 島田好「一九三四」、外山軍治「一九三四」「一九三六」、稻葉岩吉「一九三六」。
- (3) 孫玉良「一九九二」。
- (4) 例えば、鄭永振「二〇〇九」は「金毓黻が著した『渤海國志長編』は(中略)渤海文献史料研究の集大成である。(中略)文献研究では渤海史研究の最高權威とみなされている。本書は、現在でも渤海史研究者にとって不可欠の重要な参考書である。金毓黻の渤海史認識は非常に鮮明で、彼は渤海史を中國の東北地方史に含めて研究し、また日本の中國東北侵略に反對する立場から、歴史上東北が中國の領土であることを證明し、渤海史が中國史であることを學的的に究明しようとした」(四〇六―七頁)と記し、霍明琨「二〇一三」は「金毓黻《渤海國志長編》則以豐富嚴謹的史料論證了渤海國作為唐時期的地方民族政權的隸屬關係、有力回擊了日本學者的論調」(一〇七頁)、「此書把渤海國視為中國歷史上的一箇北方民族國家政權、渤海國史是中國歷史的組成部分」(三五六頁)と記す。
- (5) 霍明琨「二〇一三」一〇七頁。
- (6) 理解に問題があることは、古畑徹「二〇一三」で詳述した。したがって、本稿では冊封・朝貢關係以外に渤海を唐の領土の一部とする認識を示す箇所があるかどうかを検討する。
- (7) 遼瀋書社から一九九三年に全一〇巻で刊行。一九二〇年から一九六〇年までの長期に亙るもので、全部で一六九巻ある。原本は吉林省社會科學院圖書室藏。
- (8) この點については、すでに毛利英介「二〇一五」が稻葉岩吉(君山)との關係を軸に描き出している。本稿は、毛利氏の研究に觸發・示唆されたところが少なくない。
- (9) 金毓黻文集編輯整理組「一九九三」一―五頁。
- (10) 滿洲國任官の経緯は「日記」に記載がなく、不明な點が

- 多い。奉天圖書館副館長就任の時期にしても、金毓黻文集編輯整理組「一九九三」は一九三二年夏とするが（三頁）、胡正寧「二〇一二」は同年冬とする（五頁）。
- (11) 一九一九年刊。著者唐晏（字元素）と『渤海國記』の體裁については劉曉東「二〇〇五」参照。
- (12) 日本の憲兵に連行された時の様子は、『日記』卷六三の卷頭にある一九三一年九月二二日條には「午間移住鮑宅」としか書かれていない。しかし、『日記』卷六二の最後にある一九三一年九月二二日條の末尾に、一九三七年二月執筆の「瀋陽蒙難記」が追補されており、これによってその詳細を知ることができる。
- (13) 黃維翰とその『渤海國記』の成立事情については劉曉東「二〇〇五」参照。
- (14) ただし、一二月三〇日には『宋史』渤海傳や定安國傳についての考異を載せており、年末になってやっと気持ちがついて『渤海國志長編』撰述に向き出したことが分かる。
- (15) 第一次修補・二稿作成段階はほとんど自宅に籠つての作業で、自宅の書籍等を使用して修補を行っている。『日記』一九三二年四月二二日條には、「自今日起、謝去一切酬酢、在家不見一客、對人不輕發一言、以此爲持身涉世之方。謹志於此、以當書紳」とあり、自宅に籠る背景に、依然として續く日本軍の監視と、要職就任要請を拒否する以上は學術に専心して日本に對する抵抗の意志がないことを示す保身の意味合いがあったと推測される。
- (16) 『渤海國志長編』の「識語」には、稻葉君山・鳥山喜一・植野武雄への謝意が示されているが、『日記』を読むと彼らが實際に支援をしていることが確認でき、これが「外交辭令」ではないことがよくわかる。背景には撰述に對する苦しみと、稻葉・鳥山および内藤湖南などの日本人研究者に對する敬意の念があると思われる。稻葉君山に對する強い敬意の念については、毛利英介「二〇一五」参照。鳥山喜一への敬意は『日記』一九三一年一月二七日條など、内藤湖南への敬意は『日記』一九三三年一〇月一五日條などから窺える。
- (17) 『渤海國志長編要刪』末尾（二五葉b）に「壬申年十月初稿、癸酉年七月增補」とある。なお、筆者が調査したのは東京國立博物館資料館所藏本である。China books によれば本書の所藏はこの一館しか確認できないが、東洋史研究会大會當日、司會の堤一昭氏より大阪大學附屬圖書館所藏本の存在をご教示いただいたいき、一部寫真もいただいた。記して謝意を表するとともに、本書については別途稿を改めて論じたい。
- (18) 古人左圖右史、圖與史竝重久矣。考地理者、非圖莫明。近人撰渤海疆域圖、炯明崖略、亦時多抵牾、茲經悉心考訂、繪成數圖、以附本編之後。
- (19) 余近發願撰渤海國志長編、誓於三閱月內成。其目凡十、曰總略、凡見新舊唐書・五代史・冊府元龜者、悉移錄之、不遺一字、此爲總綱。曰世紀、考其國王世次・名諡・年號及其興滅之端。曰列卿、敘其臣宰之可考者、等諸史之列傳。曰輿地、考其府州郡縣及方隅所至、皆繫以考證。曰官制、

就其官制可考者、斷以唐制、以見大凡。曰物産、惟唐書紀其厓略、姑就其可知者言之。曰朝聘、朝者、朝於唐、聘者、聘於高麗・日本、見於諸書者尙多可考。曰兵事、渤海爲海東盛國、自其興以訖亡、兵事多可考見、次於錄之。曰余紀、錄以前各類之不能收者。曰附錄、近賢及東邦學者考論渤海故事頗多、悉加甄采、蒼爲一目、以爲之殿。

(20) 紀傳體四目の順番が紀・考・表・傳から紀・表・傳・考に變更されたのもこの時と推定される。表Ⅲで明らかなるように、第一次修補・第二稿作成の作業が紀・傳・考の順で行われたからである。

(21) 『要刪』の刊行が司馬光の『通鑑舉要』に做ったことは、『要刪』冒頭に「余撰渤海國志長編得二十卷、業已寫定、茲於付刊之、先仿司馬溫公通鑑舉要之例、擷其梗槩、撰成要刪以告讀者」とあり、楊守敬の『水經注疏要刪』に做ったことは、『靜晤室日記』一九三三年八月一九日の張伯未への返書に「拙著渤海國志長編脫稿經年、近仿楊氏水經注疏之例、纂成要刪一卷、先行付印、不日可寄、請諒正」とある。

(22) 「敍例」にもほぼ同文があるが、「大氏」が「舍利」に、「獨」が「尙」になっている。

(23) 『要刪』所載の「敍例」節録は次の通り。
率賓唐元素司馬、著有渤海國志四卷、深喜其先得我心、亟購而讀之、覺其取材未富、立證尙疏、非吾意中之渤海國志也。前歲、鍾君遜齋爲不佞言、黃申甫太守亦撰有是書、屬其借鈔、久久不得。歲月荏苒、忽賦閒居、發篋陳書、正在

今日、乃取嚮所涉覽者、比而次之、凡五閱月、得二十卷、書仍唐氏舊名、而繫以長編二字、則斬春黃師李剛之所命也。正志略分四目、曰紀、曰表、曰傳、曰考、體亦略同唐者、改志爲考、避大名也。志前冠以總略、明所自也。志後附以文徵・叢考・余錄、恣詳說也。不佞此著、壹遵史體、書法稱謂、悉具剪裁、辜較舊志、稍爲恢廓、非後人之果愈前人也。渤海故疆、半所親歷、聞見較確、一也。新著日富、考辨彌精、取材自易、二也。然知人則易、自知實難。安知不佞自謂爲恢廓者、非他人目爲疏略者乎。謹就所知、具錄於簡、既竭吾才、未敢自信。若夫整齊條理、犁然有當、以成一國之史、正有待於方聞、此亦命名長編之微旨也。

(24) 「序」を書く五日前の三一年一月一九日の『日記』には、「古人云『窮愁著書』、又云『詩三百篇、爲古人發憤之作』。誠有慨乎其言之也。余自幽居、百無聊賴、遂斐然有述作之志。」とあり、『史記』虞卿傳と司馬遷「報任少卿書」の表現を引用して、『渤海國志長編』撰述の動機・心境を述べている。

(25) 渤海國疆域地圖は『渤海國志長編』の初版本（千華山館、一九三四）には載せられているが、通行本である宋遼金元四史資料叢刊本（文海出版社、一九七七）や標點本（社會科學戰線雜誌社、一九八二）には掲載されていない。それ故、本圖の存在はあまり知られておらず、本稿が指摘する事項に氣附く研究者が今までいなかったものと思われる。

(26) 南京亡命後に書かれた「瀋陽蒙難記」は、『渤海國志長編』の撰述事情をこの事實關係として記す。そこにも金の

當時の思いと立場が反映していると思われるが、それに就いては別途稿を改めて論じたい。

(27) 毛利英介「二〇一五」。

参考文献一覽（金毓黻の著書を除く）

【日本語文獻】

稻葉岩吉「一九三六」…『金靜庵氏著渤海國志長編を讀みて』『靑丘學叢』二二三

島田好「一九三四」…『新刊紹介・渤海國志長編』『書香』六二

鄭永振「二〇〇九」…『中國の渤海認識』、東北亞歴史財團編・濱田耕策監譯『渤海の歴史と文化』、明石書店

外山軍治「一九三四」…『紹介・渤海國志長編 二十卷』『史林』一九一四

外山軍治「一九三六」…『學界展望・渤海史研究の回顧』『東洋史研究』一―五

古畑徹「二〇一三」…『唐王朝は渤海をどのように位置づけていたか——中國「東北工程」における「冊封」の理解をめぐって——』

【唐代史研究】一六

毛利英介「二〇一五」…『滿洲史と東北史のあいだ——稻葉岩吉と金毓黻の交流より——』『關西大學東西學術研究所紀要』四八

劉曉東「二〇〇五」…『中國の渤海史研究』（小嶋芳孝譯）、上田正昭監修『古代日本と渤海——能登からみた東アジア』、大巧社

【中國語文獻】

霍明琨「二〇一三」…『東北史壇巨擘金毓黻《靜晤室日記》研究』、黑龍江大學出版社

金景芳「一九八六」…『金毓黻傳略』『社會科學戰線』一九八六年第一期

金毓黻文集編輯整理組「一九九三」…『前言』、金毓黻文集編輯整理組校點『靜晤室日記』第一冊、遼陽書社

胡正寧「二〇一三」…『金毓黻先生生平事跡』、胡正寧編著『金毓黻與《中國史學史》』南京大學出版社

孫玉良「一九九二」…『前言』、孫玉良編著『渤海史料全編』、吉林文史出版社

〔附記〕 本稿は、二〇一五年度東洋史研究會大會（十一月三日）における發表を基に改稿したものである。また、科學研究費補助金基盤研究（C）「高句麗・渤海をめぐる中國・韓國の「歴史論争」克服のための基礎的研究」（課題番號二三五二〇八六一、平成二二～二六年度）及び同「中國の渤海史研究草創期についての史學史的研究——金毓黻を中心として——」（課題番號一五K〇二八九二、平成二七～三〇年度）による研究成果の一部である。

Nerchinsk Treaty started from the upper course of the Argun' River in the west, and went eastwards along the Silka and Gorbitsa Rivers, and stretched from the headwaters of the Gorbitsa to the sea in the east, following the watersheds of the Amur River. The territory south of the border was to belong to Qing, and that to the north to Russia. Jurisdiction of the district between the mountainous border and the Uda River was not demarcated at that time, and the decision was postponed for future settlement. As regards the position of this border, there have been many different opinions, and they remain confused today. For example there are two Gorbitsa Rivers, and it is not clear which Gorbitsa River is being referred to in the Nerchinsk Treaty. Some people also insist that the sea to which the watersheds of the Amur reached is not the Okhotsk Sea, but the Japan Sea.

In this paper I carefully trace the border negotiations in the Nerchinsk conference, and especially clarify over which issues the delegates of two countries opposed one another, how they resolved them, and what problems arose from the agreements. The results of this study are as follows.

(1) The Gorbitsa stipulated in the Nerchinsk Treaty is the upper tributary that flows into the Silka. As a result, Russia lost Albazin and more than twenty villages, but as compensation took possession of a district to the north of the Argun', and furthermore obtained the rights of free passage and free commerce from Qing.

(2) As regards the inland district, both countries agreed that the border extended to the Okhotsk Sea at its eastern terminus. As a result, there was no change in the territory occupied by the two countries before the Nerchinsk conference, and border was demarcated midway between the two countries.

ON THE EDITORIAL PROCESS OF THE *BOHAIGUOZHICHANGBIAN* 渤海國志長編 BY JIN YUFU 金毓黻

FURUHATA Toru

The *Bohaiguozhichangbian*, which is famous as the first monograph on Bohai history in China, was written, edited and published by Jin Yufu in Manzhouguo 滿洲國. He started the writing and editing of the *Bohaiguozhichangbian* while he was confined due to the Manchurian Incident. After his release, he assumed the post of vice-director of the national Fengtian library of Manzhouguo, but exiled himself in Shanghai in 1936. In China, researchers of Bohai history recently highly appreciate

the *Bohaiguozhichangbian* as a monograph in which Jin Yufu argued that Bohai was a local government of an ethnic group in China and in which he sought to prove that the northeast was historically a territory of China that resisted invasion by Japan. However, I am skeptical of this view. In this paper I examine the editorial process of the *Bohaiguozhichangbian* in order to investigate the credibility of this claim. The results of my examination are as follows.

1. The precise details of the editorial process of the *Bohaiguozhichangbian* are as follows ; Jin Yufu began writing and editing in November 1931 during his confinement, a complete outline was finished in December 1931 when he was released. The first draft was completed in January 1932, the second draft in April 1932, and the third draft in December 1932. Publication work was begun in August 1933, and the book was published in May 1934.
2. As the *Bohaiguozhichangbian* was completed with the cooperation of Japanese researchers, Jin Yufu evaluated their research highly and had respect and a feeling of gratitude toward them.
3. Jin Yufu strove to make the *Bohaiguozhichangbian* fit the form of traditional Chinese histories because he sought to place Bohai into the stream of northeastern Chinese history, as the Jin 金 and Qing 清 had previously been.
4. It is clear that Jin Yufu was intent on denying Manzhouguo in the *Bohaiguozhichangbian* because the name of current places on the map of Bohai in this monograph used the place name that had been used prior to the establishment of Manzhouguo. But, to conceal his intent from general readers, Jin changed the date of the preface and introductory note to December 1931 so that it appeared as if the map had been made before the establishment of Manzhouguo. The reason he wished to have people think the map was created in December 1931 was because he hoped that only those who knew the true circumstances would realize the creation of the *Bohaiguozhichangbian* was the result of his being aroused by his confinement due to the Manchurian Incident.
5. Jin Yufu did not understand that Bohai was a local government of an ethnic group within Tang China, and there was a strong local “regionalism” rather than a national “patriotism” behind his refusal to accept Manzhouguo.